

A 語句の意味と読み

(1) 山と空との境目。山のはしのところ。／ふつう月はここから出る。海の上ではそれがない

(2) 読み＝うまのはなむけ（教科書によっては「むまのはなむけ」とルビが振られる。どちらでもよいので、お使いの教科書の読み方に合わせる）／意味＝旅立つ人を送る送別の宴・餞別。／旅の無事を祈って馬の鼻に行く先の方角へ向けた習わしから

(3) 満足しない。名残惜しい。／「飽く（＝満足する）」の打消。現代語の「あきる」ではない

(4) はるか遠くを仰ぎ見る。／「さく」＝遠くへ離す。遠くを見やる動作

(5) ほめる。感心する。すばらしいと思う。／現代語の「愛する」ではない

(6) 光。ここは月の光。／★現代語の「かげ（暗い部分）」とは逆。テストの定番

B 文法

(7) 過去推量（～だったろうか）／連体形。原因を推量する用法（～だったからだろうか）とする教科書もあるので、お使いの教科書の説明に合わせる。／係助詞「や」の結びなので連体形になる

(8) 強意の係助詞。結び＝「ける」（過去の助動詞「けり」）、活用形＝連体形。／ぞ・なむ・や・か→連体形、こそ→已然形

(9) 「し」＝過去の助動詞「き」の連体形（下の「月」にかかる）。「かも」＝詠嘆の終助詞で「～だなあ・～であることよ」の意。／「き」は自分が直接経験した過去。仲麻呂が自分の目で見た三笠山の月だから「き」を使う。「かも」は疑問ではなく詠嘆

(10) 打消推量（～ないだろう）。打消可能（～できまい）とする説もある。お使いの教科書の説明に合わせる。／「べし」の打消にあたる助動詞。ここは連用形「まじく」

(11) ①直前が活用語の未然形ではないので、他への願望を表す終助詞「なむ」ではないこと。②文末が終止形「けり」ではなく連体形「ける」で結ばれており、係り結びになっている

こと。／「なむ」の識別＝①未然形＋なむ→他への願望の終助詞（～してほしい）②連用形＋なむ→完了（強意）「ぬ」の未然形「な」＋推量「む」（きっと～だろう）③文末を連体形で結ぶ→係助詞。ここは「ける」（連体形）で結んでいるので係助詞

(12) 当然（～はずだ）／已然形。推量（～だろう）と説明する教科書もあるので、お使いの教科書の説明に合わせる。／已然形＋「ば」で順接確定条件（～ので・～から）

(13) 已然形。係助詞「こそ」の結びは已然形になるから。（う行四段「入る」の已然形）／命令形とまちがえない。「こそ」を探すのが決め手

C 主語・指す内容・敬意の方向

(14) 二十日の夜の月（本文冒頭「二十日（はつか）の夜の月出でにけり」の「月」）。／「山の端もなくて」から続いている。海から直接のぼってくるもの

(15) 山の端もなく、海の中から月がのぼってくるようす。／直前の一文がそのまま答えになる

(16) この言葉話を話している仲麻呂から、和歌をよむ主体である神への敬意。／会話文の中の敬語は、話し手からの敬意になる

(17) 唐（あちら）の国の人々。本文の「かの国人」。／歌の意味を漢字で書いて説明してもらった側

D 口語訳

(18) わが国では、このような歌を、神代から神もおよみになり。／「かかる」＝このような。「給ふ」は尊敬なので「およみになる」と訳す

(19) 青々と広がる大海原をはるかに仰ぎ見ると、（この月は）故郷の春日にある三笠の山に出ていた、あの月なのだなあ。／「かも」は詠嘆で「～だなあ」。故郷を思う望郷の歌

(20) あちらの国の人々は、（この歌を）聞いてもわかるまいと（日本の側には）自然と思われたけれど。／「思ほゆ」＝自然と思われる。その主体は唐の人ではなく、こちら側（日本の人々）

(21) 都では山の端に（出入りするのを）見た月であるけれど、（ここでは）波の中から出て、波の中にこそ沈むことだよ。／「出づ」と「入る」を対にして、海上の月の珍しさを言っている

E 内容・記述

(22) 海の上にいるため、月がのぼるときの区切りとなる山と空との境目（山の端）がなく、月が海の中から直接のぼってくるから。／この珍しい月の出が、仲麻呂の話を思い出すきっかけになる

(23) 別れを惜しむ送別の宴が長引き、二十日の夜の月が海からのぼるのを見たこと。その月が、故郷の春日・三笠の山に出ていた月を思い起こさせた。／「飽かずやありけむ」から「その月は、海よりぞ出でける」までが手がかり

(24) 歌の意味を漢字（男文字）で書き出し、日本の言葉を唐の言葉に伝えている人に説明したので、歌にこめられた望郷の心が理解されたから。／「男文字に、さまを書き出だして」以下がそのまま道すじになる

(25) 国も言葉もちがうけれど、月の光が同じであるように、月を見て心を動かす人の心もまた同じなのだろう、ということ。和歌にこめた思いは国を越えて通じるという、人の心の普遍性を述べている。／★「望郷」だけでは不十分。「言葉がちがっても心は同じ」をセットで書く

F 文学史（本文全体をふまえて答える）

(26) 作者＝紀貫之。土佐の国司の任期を終えた作者が、土佐から京へ帰る五十五日ほどの船旅を書いた日記。／作者が女性のふりをして、かな文字（女手）で書いた最初期の日記文学

(27) 天の原。（『土佐日記』では「青海原」となっている）／★出典による初句のちがいは頻出。どちらの本を見ているかで答えが変わる

(28) 奈良時代に遣唐使の一行に加わって唐（中国）に渡った留学生。唐の朝廷で高い位についたが、帰国の船が流されるなどして日本に帰ることができず、唐で一生を終えた。／帰れなかった人の歌だと知ると、望郷の思いの重さがわかる

【現代語訳（全文）】

二十日の夜の月が出た。（海の上なので）山の端もなく、海の中からのぼってくる。このような（月の出）を見たからであろうか、昔、阿倍仲麻呂といった人は、唐（中国）に渡って、帰って来ようとした時に、船に乗ることになっている所で、あちらの国の人を送別の宴を開き、別れを惜しんで、あちらの国の漢詩を作ったりなどした。

（別れが）名残惜しかったのであろうか、二十日の夜の月が出るまで（その宴は続いて）いた。その月は、海からのぼったのだった。これを見て、仲麻呂どのは、「わが国では、このような歌を、神代から神もおよみになり、今は身分の高い人も中くらいの人も低い人も、このように別れを惜しみ、うれしいこともあり、悲しいこともある時にはよむのだ」と言って、よんだ歌は、

青々と広がる大海原をはるかに仰ぎ見ると、（この月は）故郷の春日にある三笠の山に出ていた、あの月なのだなあ。

とよんだのだった。あちらの国の人（日本語の歌など）聞いてもわかるまいと思われたけれど、歌の意味を漢字で、そのさまを書き出して、この国の言葉を（唐の言葉に）伝えている人に説明したところ（＝言って聞かせたところ）、歌の心を理解したのであろうか、たいそう思いのほかに（歌を）ほめたたえたのだった。唐とこの国とは、言葉は異なるものだけれど、月の光は同じであるはずだから、人の心も同じことなのであろうか。

さて、今、その昔（の仲麻呂のこと）を思いやって、ある人がよんだ歌は、

都では山の端に（出入りするのを）見た月であるけれど、（ここでは）波の中から出て、波の中にこそ沈むことだよ。